

体育指導員や連合神戸による クリーンキャンペーン 6月1日



人・街・ながた
震災資料室だより

人・街・ながた
震災資料室 発行
〒653 神戸市長田区北町3-4-13
電話(078)579-2311
発行人/寿 広文
編集人/武川・福谷

第6号

- ① 第2回震災資料展
② インタビュー
③ 生活支援アドバイザー
④ 大阪・住之江区から

9月1日～5日
長田区役所
7階ギャラリー

第2回 震災資料展
職員作品展も開催

あなたの出品を
お待ちしております
スタッフ募集中。



毎年催されていた作品展

長田区と心をつなぎ

住之江区に緊急区本部員結成される

住之江区の職員は、2年前の「阪神・淡路大震災」のおり、神戸の地を踏み数多くの体験をし、貴重な教訓を得ることができました。
その後、私たちは、この教訓を生かし区民と共に「安心して暮らせる安全なまちづくり」をめざし、計画の作成や訓練の実施

を行ってきたところです。
大阪市全体としても、「地域防災計画」の見直し作業に入り、本年3月に「震災編」をまとめるに至りました。
これを受けて私たちは、この防災計画をたてるため、この間、活動すると共に、区での緊急区本部員の結成を目指してきまし

た。
この緊急区本部員というのは、神戸の教訓のひとつである「初期初動体制の充実」を図る一手段として、30分以内に区にこれら職員を組織する（住之江区21名）ものであり、震度4以上の地震時には指示・指令がなくとも自動的に参集し、その任にあたる

というものです。
私たちは、この「結団式」を考えるにあたり、ふたつのことを考えました。
そのひとつは、区長自らが、21名に装備品（防災服・ラジオ・ヘルメット・靴等）をわたし激励すること。であり、もうひとつは、神戸、特に長田区の生の声、取り組みをできる限り自らの体内に吸収する。ということでした。
恥ずかしい話ですが、私どもは防災に対する意識がまだまだ希薄であり、長田区役所の松岡総務課長の講演で少しでも、自らの問題としてとらえられる状態にもっていかたいと考えました。
後日、その式に参加したもののからの感想を聞きましたが、多くの、教訓を得たとの報告がありました。
また、この講演も参考にさせていただきながら、「住之江区防災対策要綱」を不十分ながらも策定することができました。
さらには、6月10日・11日に発生しました「住之江区南港」での水道管事故では21名が緊急に区に参集し、徹夜で地元住民とともに活動を行なうことができました。
課長から教えていただいたことを少しだけ実践することができたのです。
私たちの取り組みは、はじまったところです。これからも多くの示唆をいただき長田区と心をつなぎながらより区民のための計画策定と実践ができるよう頑張る所存です。
ありがとうございました。

住之江区役所 森 正照



期待される 生活支援アドバイザー！

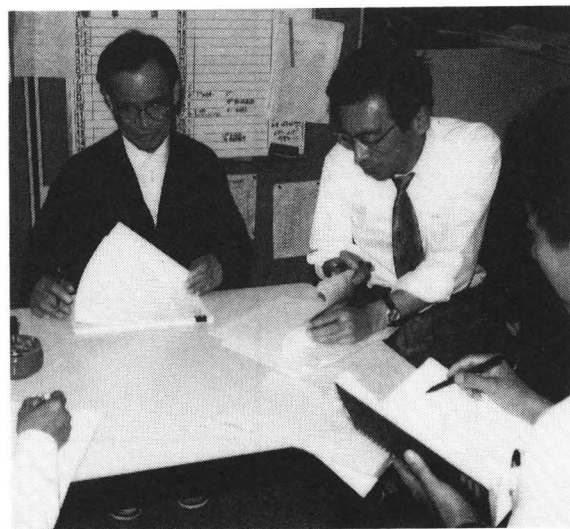
長田区市民部生活再建担当スタッフの皆さんに、六月二十日に集まっていたいただき座談会を開いた時の内容です。

生活再建担当の仕事

小島主幹「昨年の四月に、被災した市民への支援に関する事業を推進するため、各区に生活再建担当のスタッフが一―二名配置されることになり、私もその際にこの仕事に就きました。震災から約二年半が経過するなかで、担当する業務も少しずつ変化してきました。現在は、住宅情報の提供や生活再建支援金等の給付・貸付金に関する情報提供及び相談業務、また各区役所各部にまたがる支援事業の調整といった業務が、メインの仕事になっています。

なかでも、仮設住宅に入居されている方には、高齢者など弱者が多く、個々のニ

ズに応じたきめ細かな対応が求められるため仮設住宅に出向いて個々の世帯からの相談等に応じる生活支援アドバイザーが昨年八月に制度化されました。現在、長田区には六名が配置されており、区内仮設住宅を巡回訪問しているところです。」



奥田主査「私は、今年四月にこの仕事に就いたばかりですが、仮設住宅に入居されている方ははじめ被災者から寄せられる様々な苦情の対応に追われている毎日です。」

安藤アドバイザー「昨年八月に生活支援アドバイザーの仕事をやってみないかとのお話があったときには、耳慣れない制度であり、一体何をすればよいのかなあという思いを抱きつつ引き受けさせていただきました。

長田区内にはそれほど多くの仮設住宅はありませんが、例えば外国人の方も多く言葉の壁があつたりして対応に迷うこともあります。」

これからの課題

安藤「住まいの確保という観点からは、やはり場所の問題があります。アドバイザーとして、公営住宅募集の案内のため巡回し相談にも応じていますが、特に高齢者はもともと住んでいたところに戻りたいという希望が強く、長田区など市街地に立地する住宅の応募倍率が高くなつてしまっています。中には、申込の勧誘に力を入れていきます。」

高林「もとの住所地に帰り、震災前の近隣等の人間関係を取り戻したいという思いが強いように思います。」

小島「一方で、仮設住宅のときには近所づき合いがあつたのに、隣の人もめつたに話をする機会がなくなったということから、閉じこもりがちになるケースがあり、公営住宅の入居者同志、さらには地域コミュニティとの交流が必要になっています。

さらに、公的支援の問題などさまざまな課題があります。」



橋本アドバイザー「仮設住宅にお住まいの方の安否確認がアドバイザーとしての仕事の一つですが、住宅の中の様子が見えないため、プライバシーとの関連で難しいという印象をもちました。」

都留アドバイザー「まだこの仕事を始めて半月ほどしか経っていませんが、一言で言えばいろいろな意味で大変だというのが正直な感想です。」

石原アドバイザー「私も、まだ日が浅く、ようやく仮設住宅の場所を覚えた程度に過ぎませんが、入居者には高齢者が多く、生活再建に向けこれからが正念場だという気がしました。」

高林アドバイザー「私は、アドバイザーになつて一月半を経過しましたが、入居されている方とお話をして感じたことは、二つの希望を持っているということです。一つは、今の仮設住宅の環境をよりよくしたいということ・二つめは、自分の希望にかなう公営住宅に入りたいということです。それから、人付き合い上手な人と苦手な人で、生活面での差がでているのではという印象があります。」

西谷アドバイザー「昨年の八月にアドバイザーとして初めて巡回して感じたことは、震災後まもない頃と比べて、やはり少し落ちついてきたなということです。入居者には、住宅面と健康面での不安感がありますが、心の支援といえますか、こちらから雑談でもいいから話かけることが、ひとつの和みになるといった面があるように思います。」